
ラスボスと二人旅

大西洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラスボスと二人旅

【Nコード】

N4707C

【作者名】

大西洋

【あらすじ】

「俺は勇者になりたい！」こんな野望を持ってしまったのはよりにもよって魔王の息子！突然出ていった彼のせいで魔王城内は大混乱！はたして彼は、勇者になる事ができるのか？

プロローグ

ピシャーン！ゴロゴロゴロ！空には厚い雲が覆い、稲妻が絶え間なく降り注いでいる。

ここは魔王城。この世界エヴァーグラスを力と恐怖で支配する魔王が住んでいる。

その魔力は凄まじく、天候を自在に操り、彼が望むだけで山を潰し海を割り、泣く子どころか泣いてない子までをも黙らせるといふ…。人々は魔王を倒す為に何人もの勇者を魔王城に送り込んだ。

ほとんどの者が帰ってこなかったが、中には魔王を倒して英雄と呼ばれる者もいた…。しかし、魔王は倒されても倒されても20年程でまた復活し、地上を魔物で支配した…。

そうした争いの連鎖が続き、人々の記憶の記憶から魔王と勇者がいないことがなくなった頃、その魔王城で一つの事件が起きた……。

プロローグ（後書き）

この小説を読んで下さった皆さん始めまして。大西洋です。素人なのでおかしな所など多々あると思いますが、感想やご指摘を下されば幸いです。頑張りますのでよろしく願います。

魔王城での一大事（前書き）

プロローグの続きのような感じです。まだ主人公は出てきません……
… or z

魔王城での一大事

『拝啓 父上こと第35代魔王グラム・レオ・ヴァルヌス様へ

私は昔から父上に憧れていました。

地震や竜巻を起こして人間達を震えあがらせたり、勇者達を死闘の末打ち破ったり、母上にバレずに夕食をつまみ食いしたり……最後の最後のは違うか……

とにかく私ことグレア・ルル・ヴァルヌスは、父上を超えるため、あえて父上の敵である勇者になります。首を洗って待っていて下さい。

追伸 俺が立派な勇者になるまで人間達に負けんなよ！』

「魔王様！大変です！」

広い魔王城の玉座の間に、一人の魔物が駆け込んで来た。よほど急いで来たらしく、ガーゴイルという生きた石像である彼の体には、大量の汗が流れていた。

……………石像なのに……………

「…何だ騒がしい、何事だ」

玉座の間の奥、骸骨がいこうと魔石で装飾された邪悪なイスに座っていた何者かが、不機嫌そうに聞いた。

彼の名はグラム・レオ・ヴァルヌス。

この世界エヴァーグラスに住む人々は、彼の事を魔王と呼ぶ。

魔王ことグラムは、漆黒のマント（イオナ○ンすら跳ね返す！）と漆黒の鎧（ドラゴンが踏んでも壊れない！）で身を包み、その邪悪な瞳からは常に殺気が出ていた。頭には大きな角が生えている。

「グ、グレア様がこの様な置き手紙を残して、城から脱走しました！」

よく見るとガーゴイルは紙切れを持っていた。

魔王の殺気にビビっているのか、ガーゴイルはびくびくしながら魔王に置き手紙を渡した。

しかし、彼は魔王の殺気に怯えていた訳ではなかった。

彼が恐れていたのは……………

「グレアーっ！パパは悲しいぞーっ！帰ってこーい！」

親バカな魔王が……………

「パパ寂しくて泣いちゃうぞーっ！」

息子が家出したショックで……………

「……………鬱^{うつ}だ……………死のう……………」 『おやめ下さい魔王様ーっ！』

自暴自棄になることだった……

魔王が（シヨックのあまりアヒル座りしている）が今まさに自殺しようとして魔剣を抜くと、周囲の物陰から一斉に魔物達が飛び出してきた。

魔剣で自分の喉^{のど}を貫こうとする魔王を必死に組み伏せる。

彼らはガーゴイルが前もって魔王がこうなった時の為に、物陰でスタンバイしとくよう頼んでおいてあったのだ。

「離せーっ！ワシは死ぬんじやーっ！もう生きるのが嫌になったんじやーっ！」

『ワシって、魔王様はまだ150歳じゃないですか！まだまだ人生これからですよ！』

当然魔王は人間とは違い、寿命も長い。150歳とは大体人間の30代にあたる歳である。

「息子がいなくなったら、ワシの生きる意味などないんじやーっ！よってワシは死ぬんじやーっ！離せーっ！」

『魔王様！グレア様は我々が必ず連れて帰ります！』

『しっかりして下さい！』

『ささっ魔王様はもうお休み下さい！後は我々にお任せを！』

魔物達の必死の説得もあって、魔王ことグラムは

「……わかった……ワシはもう寝る……グスン……」

泣きながら寝室へ向かって行った。

ネガティブ魔王がいなくなつて、ふーっと胸をなでおろす魔物達。

「全く、魔王様の親バカも困つたもんだ」魔王を取り押さえていた魔物の一人が愚痴ぐちをこぼした。

「ああ、早くグレア様を連れ戻さないとな」

親バカな上ネガティブなグラムの事だ、早く連れ戻さないとまた自殺しようとするだろう。彼の子供はグレア一人なので、昔から魔王の息子への溺愛ひようあいぶりは凄まじかった。

「とにかく早くグレア様を見つけるのだ！」
魔物達はそう言つと魔王城から出ていった。

主人公 は 呪われた！

とある海岸の砂浜に、魔王の息子ことグレア・ルル・ヴァルヌスは倒れていた。

……意識はないが、息はしているので生きているようだ。

……えっ？なぜ魔王城から抜け出したグレアが砂浜で倒れているのかって？

その答えは2日前にある……

魔王城を抜け出したグレアは、今から始まるであろう冒険に、胸を踊らせていた。

「よし！立派な勇者になってオヤジを倒し、オヤジを超える魔王になつてやる！」

……魔王を倒した勇者が新しい魔王になつては本末転倒な気がするが……

しばらくあちこちをさまよったグレアは、魔王城の近くの海岸で、打ち上げられた小さな船を見つけた。
ボロボロではあったが。一人で乗る分には問題はない。

「やっぱり旅立ちといったら船だよな！」

冒険の前の興奮でハイテンションになっていたグレアは、何の根拠もない理由で船に乗り、大海原へ出た。

しかし、グレアは知らなかった。

まさか海に出た次の日に嵐に遭い、遠く離れた海岸まで流れ着くことになるとは……………。

という訳で、グレアはこうして海岸に流れ着き、意識を失って砂浜に倒れているのである。

体に怪我一つなかったのは、さすが魔王の息子と言っべきか…………

……………いつの間にか倒れているグレアに、一人の人間が近付いている。

そろそろグレアが起きるようだ。
では、ここからはこの小説の主人公であるグレアの視点でお楽しみ下さい。

「
おい
」

「
生きてる？
」

「
……
」

「
よいしょ！てやつ！
」

ぞ
ばーーん！

「
うぎゃらぶわあああ！
」

俺が唐突に目を覚ますと、自分が海の中にいる事に気付いた。
おもいつきり海水を飲んだので、何やら変な言葉が出てしまったよ

うだ。

「あつ！生きてた！」

なぜ自分が目を覚ますと海の中にいたのかは置いて、とりあえず陸にあがると、そこに立っていた人間が驚いたような顔をした。

「おい、貴様」

俺は体から海水をポタポタたらしつつ、立っていた人間に聞いてみた。

「なぜ俺が目を覚ますと海の中だったのか、貴様何か知らないか？」

俺の言葉には明確な殺気がこめられている。

「えーと、私が倒れていた君を海に放り投げたから！」

犯人らしき人間はあっさり白状した。

……………何で得意気なんだ？

「お前が犯人かー！海の藻屑もくすとなるがいい！」
海に放り投げた犯人らしき人間を、仕返しにおもいつきり海にぶん

投げる。

ひゅーん ざばーーん

「きゃーっ！楽しい！」

……海に投げ込まれたというのに、なぜあんなに楽しそうなのだ？

楽しそうに泳いでいる人間はほっというて、俺は周囲を見渡した。

「……………ここはいったいどこなのだ？ずいぶんと流されたようだが……………」

生まれてから一度も魔王城からこんなに遠い所に来た事がない俺が、考えてみてもわかる訳がなかった。

とりあえず、先程からずっと遊んでいる人間にでも聞いてみるか。

「おい、貴様」

「キサマ？私の名前はイーレだよ？」

「……ではイーレよ、ここはいつたどこなのだ？」

「う~~~~ん」

「……何やらすごく不安なんだが……」

「知らない！私この辺りの人じゃないから！」

「……そうか、知らんのか……」

「……何となくそんな気はしていた。」

「ねえ、君はなんでこんな所で寝ていたの？趣味？」

「そんな趣味はない！漂流したのだ！」

俺はイーレに事情を説明する事にした。

もちろん自分が魔王の息子である事は隠して…。

「……という訳で、俺はこの海岸に流れ着いていたという訳だ」

「ふむふむ、やはり男の旅立ちといえば船だよねぇ~~私男だったら旅立ちに船にしたかったんだけどな~~」

「……お前、俺の話最後まで聞いてたか？」

「当然じゃない！要するに君は勇者になりたいんでしょ？」

「そうだ」

「じゃっ、私とパーティーを組みましょ！」

「……パーティー？」

「一緒に旅をして、魔王を倒すのよ」

俺は少しだけ考えたがきっぱりと言いつつ切った。

「断る！」

「えっ！何でっ！」

「俺は誰の助けも借りん！一人でオヤ……いや魔王を倒す！」

そう、俺は名高き魔王の息子。

弱い人間と一緒に旅をする気などない！

「私もう一人で旅するの嫌だよ！パーティー組もっ！」

「お前の事など知らん！」

「うっ！それなら！」

ピロピロピロ！

イーレは魔法を唱えた！

イーレの手のひらから黒い炎が飛び出して、グレアを包み込む！

「ぐはっ！」

グレアは呪われた！

グレア のレベルが1になった！

HP が400下がった！

MP が400下がった！

ちから が400下がった！

みのまもり が400下がった！

すばやさ が400下がった！

かつこよさ が400下がった！

呪文 が封じられた！

「ふふふ…君にちょっとした呪いをかけてやったのだ！ワガママ言うからだぞ！」

「ふざけるなクソ人間！早く呪いを解け！」

俺はム力ついたのでイーレを全力で殴ろうとした…

普段の俺ならば奴を半殺しにするのは余裕であつたに違いない。

そう、普段の俺ならば……………。

グレアのこづげき！

ぼっ！

イーレに0ポイントのダメージ！

イーレの身に着けていた鎧がグレアの攻撃を跳ね返した！

「いつてえええええ！」

グレア（の右手）に80ポイントのダメージ！

グレア は 突き指した！

「な、なんてことだ！俺の体がヘナチヨコになっている！」

それよりも魔王の息子に呪いをかける冒険者つて一体……

「た、頼む！一緒に旅をしてやるから呪いを解いてくれ！」
急に低姿勢になる俺。

これも一時の恥……。

「パーティーに入ってくれるの？やったー！今呪い解くねっ」

奴が呪いを解いた瞬間が、奴の最後だ！

半殺しと言わず4分の3殺しぐらいにしてやる！

「う~~~~ん」

……………何やらまた嫌な予感が…………

「ごめんね、忘れちゃった！」

「な、なんだとーっ！すると俺は一生ヘナチヨコのままか！」

「……………私と一緒に旅したら、思い出した時に解いてあげられる
んだけど…………」

こ、これはもはや脅迫だ！

しかし、呪いを解いてもらわなければオヤジを倒すどころかザコモ
ンスターにすら勝てないであろう事は事実だ…。

「わかった、お前と一緒に旅をしてやる！ただし俺の呪いが解けるまでだぞ！」

「わーい」

「じゃっ、自己紹介ね。私の名前はイーレ・セレネイド！君の名前は？」

「……………グレアだ」

「グレア君だね。これからよろしく！」

「……………（はぁ…………）」

こうして俺は強制的にイーレと旅をする事となった……………。

主人公は呪われた！（後書き）

マイペースで書いているのでなかなか更新出来ませんでした……
orz

グレアとスライムと鍋料理

とりあえず町を目指して俺達は歩いていた…。

「ねえ、グレア」

「……なんだ？あと俺を呼ぶ時は『様』を付ける！」

「………ていつ！」

「ギャアアアツ！腕を！腕をねじるなあああ！」

俺の腕をぞうきんをしぼるが如く、^{ごと}ねじってくるイーレ。
正直痛すぎる！しかも防御できん！

「『ごめんなさい』は？」

「ごめんなさいいいいい！」

「ならばよし！」

……ようやくねじるのをやめた。

……悔しいが半泣きになってしまった……。

今の俺の防御力は小学生並らしい……。

「……で、一体何の用だったのだ？」

「……そうだった！」

……こいつ忘れてたな。

「あっ思い出した！グレアの頭に付いている角って、生えてるの？」
「なっ！！」

慌てて角を手で隠す。

俺の頭にはオヤジと同じように角が生えている。
なぜ今までイーレが気付かなかったのかが不思議だ……。

「こ、これはだな……そう、アクセサリーだ！アクセサリー！」
……我ながら苦しすぎる発言だったが……

「なーんだアクセサリーか！似合ってるよ！」
「……ありがとう」

イーレが予想以上にバカで助かった。

俺とイーレがこんな会話をしていると、不意に前から何者かが飛び出してきた。

「わっ！モンスターだ！」

スライム が 現れた！

「何だ、スライムか」

説明しよう！

スライムとはゲル状のモンスターで、魔王の兵隊であるモンスター達の中でも最弱と言われている。

あまりにも弱いので、いくら倒しても大した戦闘経験にもならず、お金も落とさない。

典型的なザコモンスターである。

スライム の こうげき！

スライムはボール状に丸まって、グレアに飛びかかった！

「ぐわっ！」

スライムの攻撃がグレアの顔面にヒット！

グレアに5ポイントのダメージ！

「き、貴様ああ！スライムの分際^{ぶんさい}で調子にのりやがってええええ！」
スライムごときが俺にダメージを与えるとは、死にたいようだなスライムよ！

「イーレ！こいつは俺一人で倒す！邪魔するなよ！」
「わかったー、頑張ってるねー！」

「さあ、覚悟はいいかスライム！ここが貴様の墓場だ！」

魔王の息子グレアVS最弱モンスターのスライム

長い戦いが始まった。

「…………ふっ、俺にここまで本気を出させたのは貴様が初めてだ！
なかなかやるではないかスライムよ！」

悔しい事に俺は本気で戦っていた。

俺の体は全力で戦ってもスライムと互角なまでに弱体化していたからだ。

……………もう俺のプライドはズタズタである。

グレア の こうげき！

スライム に8ポイントのダメージ！

スライムはピクリとも動かなくなった。

スライム を倒した！

「勝った！ついに勝ったぞ！」
長く苦い戦いが終わった。

「おめでとう！頑張ったね！」

ちなみにイーレは俺の命令を守り、今までずっとチヨウチヨを追いかけてたり花を摘んだりしていた…。

「じゃあ、今日はここで野宿にしようか！」

「……わかった。俺も今日は疲れた…」

スライムとの死闘の後、山の中を歩いていた俺達は、すっかり日も暮れたのでキャンプをする事にした。

「じゃつ、私は料理を作るからグレアは焚き火のための薪まきを拾ってきてね」

「……わかった」

「……あいつ料理なんてできるのか？」

「……拾ってきたぞ」

「お帰りー！もう料理できてるよー！」

俺が薪を拾って帰ると、イーレが鍋で具を煮ていた。

「今日は鍋料理だよ！おいしそうでしょー！」
「……ああ」

「……信じられない事にすごくいい匂いだ。
マジでうまそうである。」

「では……………いっただっきまーす！」
「……………いただきます」

イーレ特製の鍋料理を食べてみる……………

「……………うっ、美味しい！」
「でしょー！頑張って作ったんだよー」
びっくりするほど美味^{びみ}だった。
今まで食べた事の無い味である。

「……………」 無言で食べ続ける俺。

「あーっ！私の分まで食べないでよー！」

こうして俺とイーレは奪い合いながら鍋料理を平らげた。

「ふー、食った食った！」

「おいしかったねー！」

「あの鍋、具は何だったんだ？」

「えーっとねー、山菜とーキノコとー」

「……………グレアが頑張っつて倒したスライム！」

「……………グハアッ！」

バタリ。

「あれ？グレアったらもう寝るの？よっぽど疲れていたんだね」

グレアとスライムと鍋料理（後書き）

自分のような未熟者に感想を書いてくださった方々、本当にありがとうございます！

やる気がバリバリ出てきました！

これからも頑張ります！

宝箱……許さない！（byイレー）

「おおー！街だ！」

山を越えた俺たちは、遠くに街の姿を見る事ができた。

「よし、早く街に行って装備を整えるぞ！」

俺の現在の装備は魔王城から抜け出してきた時の服だけで、武器は何も持っていないかった。

俺はモンクでも武闘家でもないの、素手で戦い続けるのはいくらなんでも無理だ。

おまけに今の俺は呪いで弱体化している…。

一刻も早く装備を整えておきたい。

「……グレア、お金持ってる？」

イレーが心配そうに聞いてきた。

「当然だ！冒険に出る前に俺の貯金を……………ってあれ？財布がないぞ？」

慌てて財布を探す、見つからない…。

「……………しまった！もしかして海で漂流した時に無くしたのか！」

気付いて落胆する俺。

「うーん、私もお金持っていないから貸してあげられないし…」

……………冒険者であるお前が金を持ってないのもどうかと思うぞ……………。

「……………そうだっ！」

何かに気付いた様子のイーレ。

「お金がないなら、宝箱を探そう！」

「宝箱だと？そんなもの現実にあるわけないだろ！」

…… ったくいきなり何を言い出すのだこいつ、昨日のスライム鍋で頭がおかしくなったのか？

…… 思い出したら気持ち悪くなってきた……。

「バカヤロー！」

ばちーん！

「いつてえええ！」

トラウマに苦しんでいた俺を、当然ひっぱたくイーレ。

「何しやがる！」

「探してもないのに無いなんて言うなーっ！君には冒険のマロンが無いのかーっ！」

「うるせえ！常識で考えてそこら辺に宝箱が置いてある訳がないだろ！あとマロンじゃなくてロマンだ！」

「………そうとも言っ」

「言わねーよ！」

しかし二人共金が無いのは事実なので、とりあえず何か落ちていなか調べてみる事にした。

「グレアーっ、ちょっと来てーっ！」

「……何だ？何か見つかったのか？」

「ほらほら！カブトムシ！大きいでしょー！」
「……………」

「ごんっ！」

「痛いよー！」
「真面目にやれー！」
「はーい」

「グレアーっ、ちょっと来てー！」

「……………何だ」

「ほらほら！クワガタ……」

「ごんっ！」

「……さっさと逃がせ」

「……うっ、殺気が怖いよう……」

「グレアーっ、すごい見つけたよーっ！」

「………また虫だったら覚悟しろ……」

「違うよーっ！怪しい洞窟どうくつがあったんだよーっ！」

「何っ！すぐに行くから待ってる！」

俺がイーレの所に行くと、そこにはあからさまに怪しい洞窟があった。

「えへへっ！偉いでしょ！」
胸を張るイーレ。

……今気付いたがこいつ地味に胸でかいな……宝の持ち腐れってやつか……。

「よくやった！中に入るぞ！」

これだけ怪しいと、中に本当に宝箱がありそうだ。

しかし……

「えっ？私も入るの？」

イーレの笑顔が凍り付いていた。

「……怖いよーっ！私暗い所ダメなんだよーっ！」

「やめろ！くつつくな！」

松明で洞窟を照らしながら進んでいると、イーレがしがみついていた。
たいまつ

普通ならとてもうれしいシチュエーションなのだが、こいつにくっ

つかれても全くうれしくないのはなぜだろう…？

「キキキイ！」

「キヤーツ！こつもり！こつもり！」

ぎゅーっ！

「ぐええええ！首を絞めるなあああ！」

……………俺が死んだ時は、絶対イーレの前に化けて出てやる！

そうして俺は酸欠で死にそうになりつつ、イーレは俺の後ろで怖がりつつ、洞窟の奥へと進んだ。

「ん？あれは……………」

俺は洞窟の一番奥らしき所で、何かを発見した。

グレア達は 宝箱を 見つけた。

「やったー！宝箱だーっ！」

「……まさか本当にあるとは……」

喜ぶイーレと、ただ驚く俺。

「グレア、早く開けなよ！」

宝箱の中身が気になるのか、目が輝いているイーレ。

……しかたがない。

「イーレ、お前が開ける」

「えっ？」

「この洞窟を見つけたのはお前だ。お前がこの宝箱を開ける権利がある」

「……いいの？」

「早く開ける、俺の気が変わる前にな」

「わかった、ありがとう！」

「……フンッ！感謝するなら早く俺の呪いを解いてくれ」

イーレがそろそろと宝箱に近付く。

俺も中身が気になるので宝箱の方を見る。

緊張する……早く開けてくれ！

「ていつ！」

イーレが豪快に宝箱を開けた！

さて……中身は？

「
……」
「
……」

そう……。
宝箱には……。

「
…… ハズレ…… だな……」

何も入ってなかった。
ただ一つ……。
「ハズレ」と書いてある紙以外は……。

「
…… その…… 残念だったな……」

俺は悔しいのかブルブル震えているイーレに声をかけた。

その時
俺は確かに聞いた。

ブチン！

イーレの何かが切れる音を……。

「――！」

ピロピロピロ！

イーレ は 呪文を唱えた！

イーレが突然声にならない叫びをあげると、天井が崩れて宝箱は大きな岩の下敷きになってしまった。

「ハズレだと！ ケンカ売ってんのか箱のくせに！ 箱のくせに！」

「イ、イーレ！ 落ち着け！」

イーレはこなごなになった宝箱をさらに踏み付けている。

よほど頭に来たらしい……。

ゴゴゴゴゴ！

俺達の立っている地面がまるで地震のように揺れだした！

「ヤバい…洞窟が崩れるぞ！」

どうやらイーレが呪文で洞窟の天井を落としたせいで、洞窟が崩れかかっているらしい。

「早く逃げるぞ！」

「まだまだ！こいつに生まれてきた事を後悔させてやるんだから！」

「このままじゃ俺が後悔する事になるんだよ！いいから来い！」

俺はイーレの手を掴むと、洞窟の出口に向かって走った。

「……何とか、無事だったな」

俺の目の前には、崩れて完全に埋まってしまった洞窟があった。

「あゝあ、お金見つからなかったね」

イーレはがっかりしている。

宝箱が見つかっただけに、中身が空だったのがショックなのだろう…。

「……しかたがない、街で働くか？」

「……うん」

こうして俺達は、金が無いまま街に行く事にした。

魔王城より中継です。

「魔王め！覚悟しろ！」

入口の扉を剣で切り裂き、勇者達が魔王城に乗り込んできた。

勇者達は三人組で、先頭から戦士、魔法使い、僧侶の順番で一直線に魔王のいる玉座の間に向かっている。

どの顔もまだ若い、全員すでに一人前の顔である。

これまでに相当の数の戦闘と試練を乗り越えてきたのだろう。

魔王城に乗り込んでいるというのに、その表情には怯えがない。

バンッ！

勇者達が玉座の間の扉を勢いよく開けると、そこには彼らの最後にして最強の敵、魔王グラムがいた。

「魔王！お前の支配も今日で終わりだ！」

場の空気は極度まで張り詰めている。

戦士が剣を抜き、魔法使いは魔導書を開き、僧侶は杖をかまえた。

世界の命運をかけた戦いが、今まさに始まろうとしていた……………

……………が、

「……………はあ……………グレアはワシの事が嫌いになったのかなあ……………

……………ああ……………死にたい……………」

肝心の魔王のテンションが、どん底まで低かったのだった……………。

「ねえ、なんだか魔王の様子がおかしいわ」
勇者達の一人、魔法使いらしき女が、そつと戦士に相談した。

「なんだかスキだらけだから、今の内にサクツと殺っちゃおうか？」
僧侶が戦士にとんでもない事をサラリと提案した。

……………こいつ本当に僧侶か？

「いや、我々は誇り高き勇者だ！そんな卑怯なまねは絶対にできん
！」

どうやら戦士は熱い人らしい。
それに彼らのリーダーのようだ。

「邪悪な魔王よ！破壊と混沌を何よりも望むお前が、一体どうした
というのだ！話だけなら聞いてやろう！」

勇者達の代表として戦士がグラムに尋ねた。

「……………ワシが望むのは家族全員が元気で仲良く暮らす事だけだ…
……………」

……………ずいぶんと家族愛に満ち溢れた、平和的思考の魔王である…。

「勇者達よ……………ワシの話を聞いてくれないか……………」

魔王はポツポツと勇者達に話し始めた。

……………なんだかすごい光景である。

「……………という事で、ワシのかわいいグレアが家出してしまったの
だ……………もうワシはどうすればいいのだ……………」

「……………なるほど、それは大変だな！人生そんな事もある！元気だせ！」

「……………うう、ありがとう、ありがとう」

優しく魔王の肩を叩く戦士。

「……………何で打ち解けてるわけ？」

「……………さあ？」

その後ろでは魔法使いと僧侶があきれ顔で立っていた。

「ありがとう戦士よ、お前とは出来れば違う形で会いたかったぞ！」

「ああ……………俺もだ魔王！もし出会えた場所が違ったなら俺達いい友になれたかもしれないな！」

熱い抱擁ほうようを交わす魔王と戦士。

「……………何やってんだろ……………二人とも……………」僧侶が男の友情で結ばれつつある二人を冷めた目で見つめていた……………。

「しかし！我々は敵同士！所詮は戦しよせんって憎みあう運命なのだ！」

「ああ、悲しいがこれも運命！魔王よ！いざ勝負！」

『えっ！？このタイミングで戦うの？』

ノリノリの二人に完全に乗り遅れた魔法使いと僧侶であった……………。

「ふっ、その程度の力ではまだワシを倒す事はできん！」

グラム目の前には、力尽きた勇者達が倒れていた。殺してはいないが、もはや指一本動かせないだろう。

ピロピロピロ！

グラムは勇者達に近付くと呪文を唱えた。

すると、勇者達の身に付けていた武器や防具が全て外れ、勇者達は光に包まれて消えてしまった。

別に殺した訳ではない。勇者達の今までの記憶を奪い、魔王城から遠く離れた所にワープさせたのだ。

彼らは自分達が勇者であつた事すら忘れているだろう…。

「……グレア、お前は今どこにいるのだ………」

一人になった魔王は、ポツリと独り言をもらすのだった……。

さて、そのころグレア達は……。

「おいねーちゃん！酒足りねーぞ！」

「はい、今用意します！」

「ちょっと！料理はまだなの？早くしてちょうだい！」

「……くっそー！なぜ俺がこんな目に！」

……バイトしていた。

魔王城より中継です。(後書き)

今回は空白部分をいつもより少なくしてみました。いかがでしょうか？

初めての街！バイト編

さて、魔王城に勇者達が乗り込んでいた頃、グレア達はようやく街に着いていた。

「さて……………金がない訳だが、どこで働く？」

「うゝん……………あつ！あそこにある武器屋さんはどうかな！」

近くにある武器屋を指差すイーレ。

とりあえず行ってみる事にした。

「すみませーん」

「おう嬢ちゃん！武器を買いにきたのか？」

イーレが武器屋に入ると、かっぶく恰幅のよい店主が出迎えてきた。

「いえ、私達今お金が無いので、どこか働かせてもらえる所を探しているのですが……………」

「ん？」

武器屋の店主は、まるで品定めでもしているかのように俺とイーレを見比べた。

「……………よし、お嬢ちゃんウチで働かないか？かわいいから給料サービスするよ…ウヘヘヘヘ」

武器屋の店主は下心みえみえの笑みを浮かべた。

これはキモい！

これはキモいー！

「……………イーレ！ここで働かせてもらったらどうだ？セクハラされた

時凶器には困らないぞ！なんたつて武器屋だしな！」

「そうだね！剣に斧、槍にモーニングスター、どの武器もすごく攻撃力が高そうだよ！どの武器を使おうかなあ……」

「あの斬馬刀はどうだ？馬だつて一刀両断できるぞ？」

「わあ！大きな刀！どんな敵でもイチコロだね！」

「そう、どんな敵でもな……」

俺は武器屋の店主を見た。

イーレも店主を見た。

店主は冷や汗をかいている。

「ひいゝすいません！命だけはお助けを〜！」

店主は店に逃げ込んでしまった。

「……さて、他の店を探るか」

「そだね」

そうして俺達は街中の店を訪ねた。

「……いい所見つからないね……」

「……ああ、就職って難しいのだな……」

正確には就職ではなくバイト探しのだが……。

俺達は仕事探しに疲れて休んでいた。

時刻はもう夕方、辺りはうつすらと暗くなつてきている。

「ん？あれは……」

俺は、近くにあった一軒の酒場が目止まった。

中は大勢の冒険者達で混雑していて、いかにも忙しそうである。

「イーレ、あの酒場はどうだ？」

「……ZZZ……もう食べられないよ……」

「つて寝てんじゃねえ！」

「……なんてベタな寝言だ……」

「……おい、起きろ」

「ふえ！？」

俺が起こすと、イーレはなぜかすごい勢いで立ち上がり周りを見渡した。

「…あれ？グレア…？さっきまで緑色だったはずなのに…」

「どんな夢だ！寝ぼけてないでさつさとあの店に行くぞ！」

「はい」

「……こんばんは」

俺達は混雑した酒場に入ると、客達にぶつかりながらも何とか店の奥に行く事ができた。

店の奥のカウンターでは店主らしきオヤジが忙しそうに客に酒や料理を出している。

「何だボウズ！客か？」

俺達に気付いた店主が尋ねてきた。

「……いや、俺達は客ではない」

そう言っただけで俺は店主に事情を説明した。

「……つまり、俺達をあなたの店で働かせて欲しいのだが……」

「何だ、それなら大歓迎だ！見ての通りウチは人手が足りなくてな！」

そう言うと店主は俺達を店の奥に入れてくれた。

「とりあえず嬢ちゃんに注文の品を運んでくれ」

「はい」

「ボウズは俺の料理を手伝ってくれ」

「…わかった」

店主から仕事の内容が伝えられる。こうして俺達のバイトが始まった。

「おーいねーちゃん！酒足りねーぞ！」

「はい、今用意します！」

「ちょっと！料理はまだなの？早くしてちょうだい！」

「……くつそー！なぜ俺がこんな目に！俺は魔王になる男だぞ！」

「ボウズ！ブツブツ言ってねえで仕事しろ！」

酒場の仕事は恐ろしく忙しかった。

酒場から溢れるほどの客はほとんどが冒険者で、よく食いよく飲む。なぜこんなにも混雑しているのかというと、近くにこの辺りでは見かけない魔物が出たので、倒してやろうと冒険者達がこの街に集まってきたかららしい…。

噂ではとても珍しい宝を持っているとかいないとか……。

「グレア！とても珍しい宝だって！どんな魔物なんだろう？」

もぐもぐ

「ああ、次はそこに行ってみるか……ってオイ！客の料理を勝手に食うな！」

「ガハハハハ！面白いねーちゃんだな！ホラこれも食べ！」

「わーい！ありがとう！」

酔っ払った客となぜか打ち解けてるイーレ。

恐るべしアルコールパワー！

「いやゝ助かった！」

店主のオヤジは疲れた顔に笑みを浮かべた。

俺達もすでにクタクタである。

冒険者達は夜遅くなくてもなかなか帰ってくれず、酒場が空になったのは深夜になってからであつた。

「ホラ給料だ！よく働いてくれたからサービスしておいたぞ！」

「ありがとうございます。」

俺達は店主から給料を受け取ると、酒場を出た。

「疲れたよ、宿屋に行こうよ」

「野宿でいいだろ」

「えっ！せっかくお金もらったのにっ！」

不満そうなイーレ。

「だからだろ、また金が無くなったらどうするんだ？」

「……わかった、ガマンする……」

どうやら諦めたようだ。

さすがにまた働くハメになるのは嫌らしい。

こうして俺達は一旦街を出て野宿を始めた。

「ZZZ……久しぶりにベッドで寝たかったよう……ぐっ」
「……………」

俺は寝言でも文句を言われるハメになった……………。

初めての街！買い物編（前書き）

更新がだいぶ遅れました……。

見てくださっている方々、本当にすみません！

自分は受験生なので、これからも定期的に更新できない事が多々あると思います。

こんなヘタレな大西洋ですが、暖かい目で見守って下されば幸いです。

これからも頑張って更新するので、よろしく願いします。

初めての街！買い物編

「……うん」

頭が痛い……。

多分寝不足が原因だろう……。

「ふんふん」

イーレの鼻歌が聞こえる……。

どうやらすでに起きていたらしい……。

俺もそろそろ起きるとしよう。

イーレは食事を作っているのか、何やらいい匂いがする。

「上手に焼けましたー！」

「……お前はいつの間に冒険者からハンターに転職したのだ？」

寝不足でテンションの低い俺がいつものようにツツコミを入れる。

「あっ！グレア起きたの？」

「ああ、今起きたところだ」

「よかった！昼ご飯できたよ！」

「……昼だと！そんなに寝てたのか！」

「うん！全然起きなかったよ！頑張って起こそうとはしたけど……」

……

「……何をした？」

「えっと……最初は呼んだりほつぺたを引っ張ったりしたんだけど、全然起きなかったから……」

何だろう……嫌な予感がする……。

「ムシャクシャしたから、ついグレアをマウントポジションでボコボコにしちゃった！ごめんね！」

俺はそーつと自分の顔に手をやった。

……腫れている、すごく痛い。

こんだけボコボコにされてよく起きなかったな、俺。

「……お前はなぜ暴力でしか物事を解決できんだ！他にも何か方法があるだろ！」

「ふふ、若さゆえの過ちよ！」

なぜ威張る！しかも意味不明だその答え！

「若さって……一体お前何歳だ？」

「心はいつでも15歳！」

「……………」

……朝からこいつのボケに付き合うのは疲れる……。

俺は会話を止めて朝食を兼ねた昼食を食べ始めた。

さて、昨日のバイトでお金が入った俺達は買い物のため再び街に戻った。

「……………じゃあ、買い物が終わったらここに集合だ」

「はい」

俺はイーレと別れて、自分の装備を買いに行く事にした……。

「……………とは言っても、さすがに高い物は買えないな……………」

酒場の店主は確かに少し多めに給料をくれたが、それでも一から装備を整えるとなるとお金が足りない。

「……………こんな時、他の勇者はどうやって装備を整えるのだろうか……」

……

まさか勝手に民家のタンスやツボを調べる勇者もいるとは、夢にも思っていないグレアであった……。

グレアが安い装備を探して街を歩いていると、ある店が目にとまった。見た目は普通の武器屋だが、中に置いてある商品が普通の武器

屋や防具屋には置いてない珍しい物であった。

「……………少し、覗いてみるか……………」

どうせ高くて買えないであろうと思いつつ、グレアは店に入った。店の中に入ると、中には珍しい武器や防具がずらりと並んでいる。それらを一つ一つ眺めていると、ふと置かれていたある物が目に入った。

それは剣であった。

ただし、剣にしては少しばかり大きすぎであったが……………。

どう見ても一メートル半はある刃は、なぜか真っ赤に染まっていて、気のせいか血の匂いがする……………。

どう見ても勇者の持つ剣には見えなかった……………。

「……………誰が買うのだ？こんな剣……………」

何となく気になった俺は、ついその剣を手にとってしまった。持ってみると、予想に反して俺でも振り回せるほど軽い。

「……………ふむ、なかなかよい剣ではないか！」

値段によつては買おうと決めて、俺はその剣の値段を見てみた。

剣の値段	3000
俺の所持金	3000

「……………無理だな」

この剣にしては安過ぎる値段なのだが、さすがに防具も買う予定なので諦めるしかない……………。

少し残念だが、元の場所に返す事にした。

……………が、

なんと！血塗られた巨刃＋10は呪われていた！
血塗られた巨刃＋10は外せない！

「何でこの店は呪われている剣など売っているのだーっ！」

俺は何とか剣を手放そうとするが、まるで俺の体の一部であるかのようにくっついて離れない。

「この！さつさと離れる！」

「……………アンタ、商品に触れてしまったのか……………」

俺の後ろには、いつの間にかこの店の店主らしき男が立っていた。

「おい！この剣は呪われているぞ！」

「ああ、この商品は大抵呪われているよ」

「……………なんだと」

「ここは呪われている武器や防具を安く売る店なんだよ」
そう言くと店主は手を出してきた。

「まっ、そういう事でその剣の代金を……………」

「こんな呪われた剣などいらん！返す！」

「では、呪いの解除代を払ってくれ」

「金取るのかよ！」

「当然だ、そこに書いてあるだろ」

店主が指差すと、そこには

「呪いの解除代 4000」と書いてある紙が貼られていた。

……………全然気付かなかった。

「もし払えないとか言うなら……………」

パチン！

店主が指を鳴らすと、店の奥からマッチョな荒くれ者達がぞろぞろと出てきた。

すごく暑苦しい

「どうなるか……………わかるな？」

店主がそう言くと、荒くれ者達は一斉にマッスルなポーズを見せてきた。

荒くれ者達の表情はどこか誇らしげだ。

き、気色悪い！

「わ、わかった！買う！」

「まいど」

俺は剣の代金を払って店を出た。

店を出る時に荒くれ者達が残念そうな顔をしたのを覚えている。

……… 一体奴等は俺に何をするつもりだったのだろうか………。

「お帰り〜！遅かったね！」

俺が待ち合わせ場所に帰ると、すでに買い物を終えたイーレが待っていた。

「お前は何を買ったのだ？」

「えつとね………」

俺が尋ねると、イーレは買った品物を出し始めた。

「じゃーん！回復アイテム！」

「おおー！」

イーレにしてはまともな買い物をするではないか！

「何買ったんだ？」

「えつと……薬草と〜傷薬と〜………」

ふむふむ、なかなかオーソドックスな回復アイテムだな。

「……後はアップルグミとまんまるドロップ！」

……… ってオイ！

「……… なんてお菓子なぞ買っているのだーっ！遠足ではないんだぞ！」

「だって回復アイテム売り場に置いてあったもん！」

「グミやアメでケガが治るか！」

とりあえず没収だ！

「返してよ〜！私の心の回復アイテム〜！」

「……… MPでも回復するのか？」

「そうじゃないもん！効果は状態異常の回復だもん！」

「……何だ？解毒剤でも入ってたのか？」

「状態異常『なんかダルい』『いまいちやる気が出ない』『甘い物食べたい』を治す事ができるんだよ！」

「……そうか、じゃあ俺の状態異常『とりあえず一回殴りたい』も治るかな……」

「すでに手遅れのようにです」

「うるせえ！誰のせいだーっ！」

この後しばらく、不毛な言い争いが続くのであった……。

——30分後

「——ハア……ハア……ところで、グレアの背中の剣は何？」

「……ああ、これか？だまされて無理やり買わされてな」

「ふん……」

イーレは俺の剣が気になるのか、ぺたぺた触ったりしている。
すると……

「グレア、私にも持たせて！」

突然こんな事を言い出した。

「いや……貸してやつても良いのだが……多分無理だと思う」

「えゝ！何でゝ！」

どうやら俺が貸し渋っていると思ったらしく、いきなり俺の腕と剣を無理やり引き離そうとした。

もちろん呪われた剣は俺から離れる気などなく、俺の腕はミシミシと悲鳴をあげ始めた。

「ギヤアアアア！腕があああ！」

「独り占めしないで私にも貸してよゝ！」

「そういつつもりはない！この剣は呪われていて俺から離れないのだ！」

「……なんだ！イーレ納得！」

やっと理解したイーレは、ようやく手を離れた。

「それにしてもグレアはよく呪われるね〜」

「……最初に呪ったのは誰だったかな……」

「きっとグレアの前世はわら人形だね！」

「……………生物ですらないのか……………」

こうして俺達の散々な買い物は終わった。

「次は酒場で聞いたモンスターの退治だね！」

「……………ああ、どんなモンスターなんだろうな」

「グレアみたいな怖くないモンスターがいいなあ」

「……………（こいつ……………いつか絶対に泣かす！）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4707c/>

ラスボスと二人旅

2010年10月10日20時47分発行